

VELUX®

ROOF WINDOWS

Light and Architecture

S氏邸／阿部 勤(アルテック建築研究所)	4
K氏邸／石井 修(美建. 設計事務所)	6
美術館「as it is」／中村好文	8
Y氏邸／高橋修一(住まい塾主宰)	10
キャベツ畑の家／白井克典	12
アーティストの家／秋葉謙司	14
S氏アトリエ／田中英男	16
芦原ニセコ山荘／圓山彬雄(URB建築研究所)	18

上を向いて住まう。(豎形住居)

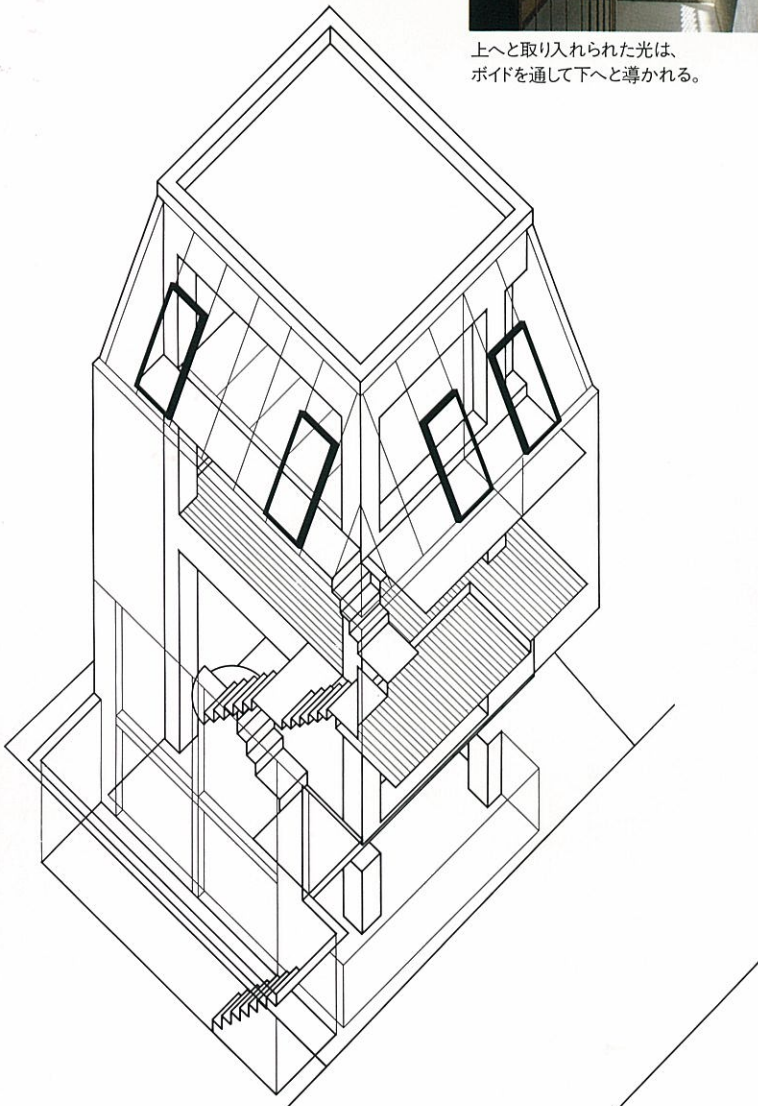


空間は上へと開かれている。

S氏邸 / 阿部 勤(アルテック建築研究所)



上へと取り入れられた光は、ボイドを通して下へと導かれる。



地価の高い目黒の20坪の敷地を最大限利用するため、許容最大スペースをローコストで作るという、一大プロジェクトである。断面を見ていただくとその道のプロの方には苦勞がおわかりいただけると思うが、高さのかせげの南側はヘルメットの寸法まで計算し施工可能ぎりぎりまで寄せ、道路斜線部分は逆スラブのキャンティレバーとし天井高さをぎりぎり押さえ、軒高6.15 mの範囲で3フロアとっている。地下は施工上、コスト上、深さをぎりぎり押さえ、建ぺい率上残されたわずかな空気をドライエリアとして掘り込み、地下の空間的拡がりをもたせている。

開口は南側は敷地いっぱい、北も住まいが密集しているため、プライバシーを考えると大きなものは望めず、唯一残された自然、「上」に開くしかないという事で、斜線でカットされた部分を全面開口とし、そこから取り入れた光を、ボイド及び階段室を透し下階に導入する断面計画とした。またこのトップライトは一部を開閉できるようにし、ドラフト効果を利用した通風が取れるようにしている。



阿部 勤プロフィール

1936年東京都生まれ。1960年早稲田大学卒業、坂倉準三建築研究所入所。1975年室伏次郎と共にアルテック建築研究所設立。1985年「夢科荘レーネサイドスタンレー」で日本建築協会新人賞受賞。現在、日本大学芸術学部の非常勤講師をつとめる。

丸い屋根につくルーフウインドウ。



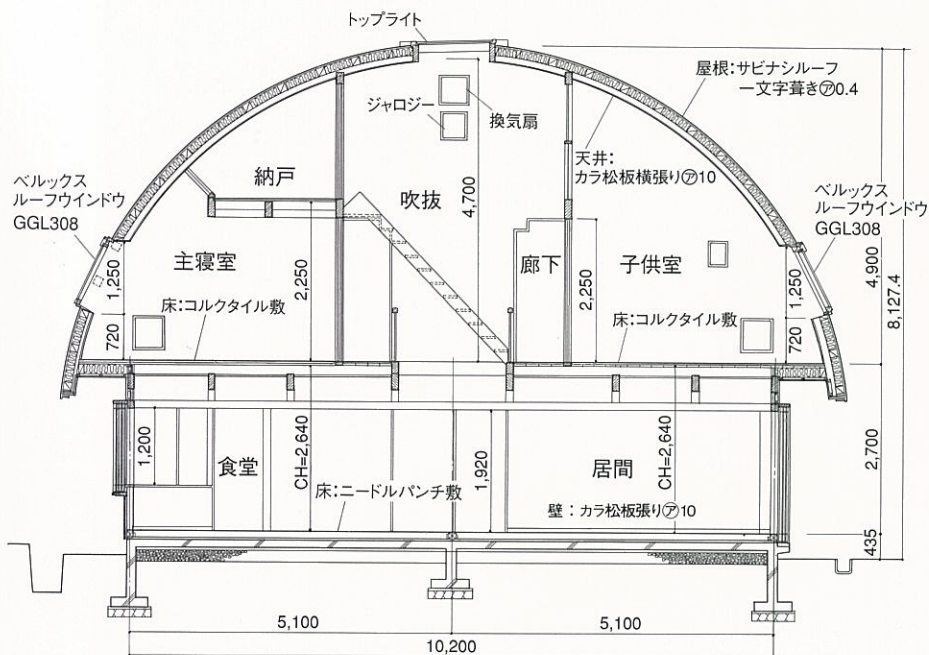
円弧の断面を持つ形体は、
外観をより一層小じんまりと見せ、
サビナシルーフのグレーと相まって
家並みの中で違和感を感じさせな

子供室のルーフウインドウを
開けた状態。

K氏邸 / 石井 修(美建・設計事務所)



木立の間に見えかくれる
ルーフウィンドウ。



小さな敷地に建つ木造の小住宅である。娘夫婦とその子供達が暮らすためにつくられたこの住宅は娘(久米智子)と共同で設計した作品である。もうだいぶ大きくなった孫達(中2、小4)がまだ小さかった頃、自分達の家のことを「丸いお屋根のおうち」と呼んでいた。

丸い屋根のてっぺんははめ殺しの大きなガラスになっていて吹抜の室内に陽光がふりそそぐ。入居直後、最初に月や星をみつけたのも孫達で、大きなトップライトは室内空間へ様々な自然の営みをもたらしてくれる。丸い屋根の下部は2階の部屋の壁面で屋根にはベルックスのルーフウィンドウがついている。小さな窓であるが光がよく入り、開閉が簡単で風もよく通る。壁、天井ともカラ松の板張りのところに、ルーフウィンドウの窓枠は木製でよく調和し、ペアガラスで断熱が良く、ガラスの外表面を簡単にふくことができる。又雨仕舞が良くできているので、屋根窓に使っても雨もりの心配もないと思う。



石井修プロフィール

1922年奈良県明日香村に生まれる。1940年吉野工業学校建築科卒業後、大林組・東京支社勤務。早稲田高工建築学科に学ぶ。海軍建築部および陸軍航空隊に応召。戦後、大林組に復職。1956年美建・設計事務所を開設。第1回兵庫県みどりの建築賞、受賞2件(シャルレ本社ビル、カトリック祭の家)。1987年/1986年度日本建築学会賞受賞(目神山の一連の住宅)、第12回吉田五十八賞受賞(目神山の家8)。

天窓から静かに降り注ぐ自然光の微粒子。

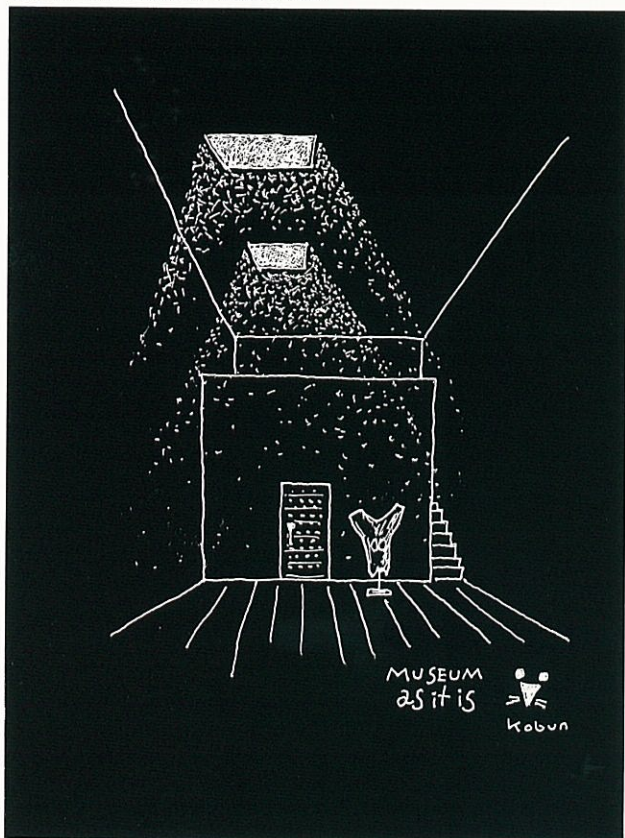


美術館「as it is」／中村好文



林の中にひっそりとたたずむ美術館。
外壁には建物の足元から掘り出された土が塗られている。
美しく朽ちていく自然素材は、この美術館のもうひとつのテーマである。

展示品は彫刻的なフォルムを持つアフリカやヨーロッパ中世の生活の道具たち。
ここに天窓からの拡散光が時間とともに
ゆるやかに角度を変えながら終日降り注ぐ。



美術館「as it is」は千葉の山中にひっそりと建っています。ひび割れた土壁に包まれ、極端に窓の少ないこの建物を、大きな納屋と勘違いする人がいると聞きます。

まったく、そのとおり。外部ばかりでなく、内部もまた納屋の内部そのものです。人目をひく奇抜や斬新とは縁遠いガランとした簡素そのものの大きな空間がひとつ。しかし、注意深い訪問者なら、この「納屋」の内部に豊饒な自然光が充滿していることに気付くことでしょう。

そう。三つの天窓からの採光とその穏やかな光の推移こそ、この美術館の主要な建築的テーマだったのです。古今東西、時空のへたでなく選ばれた生活や信仰に使われて来た珠玉の道具たちに、天空からの微粒子のような光が終日静かに降り注いでいます。



中村好文プロフィール

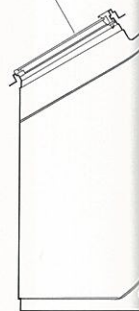
1948年千葉県生まれ。武蔵野美術大学建築学科卒業。六道設計事務所、品川職業訓練校、吉村順三設計事務所を経て、1981年レミングハウスを設立。職人衆との親密なセッションとも呼ぶべき独自の手法で住宅設計と家具デザインに取り組み、現在にいたる。1987年、「三谷さんの家」で第1回吉岡賞、1994年、「一連の住宅作品」で第18回吉田五十八賞・特別賞を受賞。主な著書に「住宅作法」（吉村順三氏と共著）がある。

建築そして素材も自由に自然なものでありたい。



月、星との出会い。
ルーフウインドウからの光が 建築の一部となり、
静寂をもたらしてくれる。

ベルックス ルーフウインドウ
GGL606



時を重ねて味わいを深めてゆくことの
良さだけは忘れまい(談)。
自然の中に建つ、
時間と手間をかけた手づくりの住宅。

Y氏邸／高橋修一(住まい塾主宰)

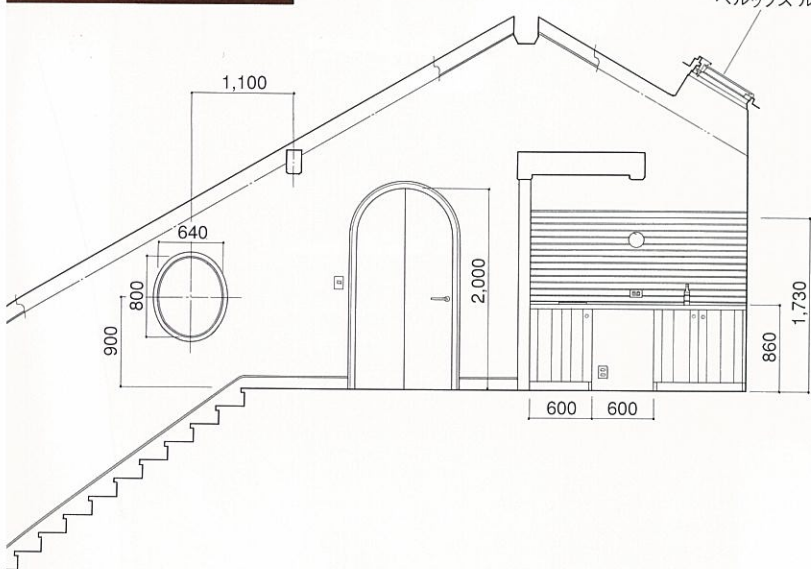


上部から降りそそぐ光には、ロマンティックな要素が多分に含まれている。都市生活者に朝焼け、夕焼けの感動は失われたが、せめて天窗を通して月や星に会うことはできる。採光や換気の装置としてだけでなく、天空の表情と我々を繋ぐ媒体となる時、それは生きて建築の一部となる。

住み手の要望でもあったが、このYさんの家は明るく明るくと望まれることの多い時代に、珍しく窓からの明りを抑えた建築であった。明は暗とのコントラストで生きるものだ。比較的暗めの空間に天窗からの光が静寂をもたらした効果的であった。

建築は決して設計者一人の作品ではなく、施工職人、建主他、直接には見えない沢山の人の協働による作品だと考えている私は、参加する人々の人間関係も、建築そのものも、自由で自然なものでありたいと願っている。使われる建築素材についても、自然素材を中心にと努めている我々にとって、工業製品の中にベルルクスのような温かい感触をもつものがあるということはうれしいことだ。

ベルルクス ルーフウインドウ GGL101



高橋修一 プロフィール

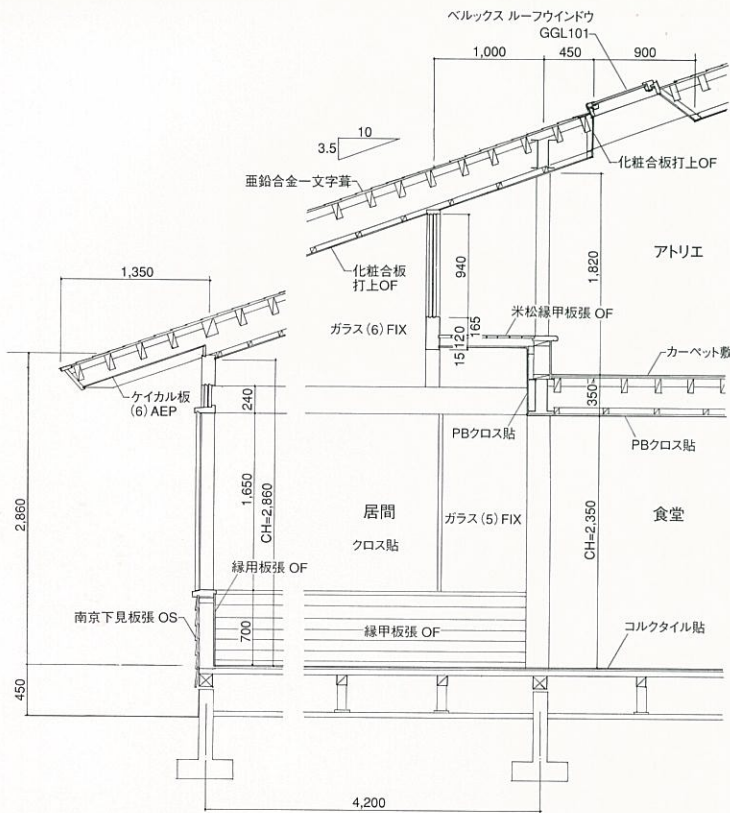
1947年秋田県生まれ。東京理科大学工学部建築学科卒業。同大学建築学科助手を経て、1973年白井晟一研究所に入所。1983年より、設計者、施工業者・職人、建主が相互の理解と共感をベースに、一体となって、豊かな生活のための住まいづくりをめざす「住まい塾」運動に取り組み、現在に至る。主な著書に、「知的住まいづくり考」(TBSブリタニカ)「住まいづくりの基本」(ヒューマン・リレーションズ研究所)などがある。

季節感ある風が通い合うアトリエ。



天窗の下で風のかおりを受けながらニットを編む。

キャベツ畑の家／白井克典



トップライトをスリット状に切り、屋根裏の天井高を確保している。
ガラス屋根とベルックスを組合せ、通風が得られる。



豊橋の一面キャベツに彩られた畑の中にぼつんと建つ農家の住いである。畑に向かった大きな開口部のどこからも、四季ごと変化していく自作の農作物を眺めながら季節感ある暮らしをしている。

中央部の大屋根の架かる部分はパブリックスペースにまとめられ、屋根裏には居間の吹抜けと連がり、ガラス屋根と天窓を組み合わせたトップライトをもつニットデザインのアトリエがある。

このアトリエは畑の様子を見おろしたり、天空の表情を知ることが出来るだけでなく、栽培した野菜のかおりや南方の遠州灘からの潮風などが、時折天窓を通して出入りしている。

農業の傍ら、ニットデザインを仕事につくクライアントにとっては、畑や空の様子、風の気配などを日々気にしながら農作物の収穫をたのしみに創作活動が出来る恰好のアトリエである。



白井克典プロフィール

1957年愛知県生まれ。1980年日本工業大学卒業、林・山田・中原設計同人入所、現在に至る。地域的な住まいづくりをめざす。

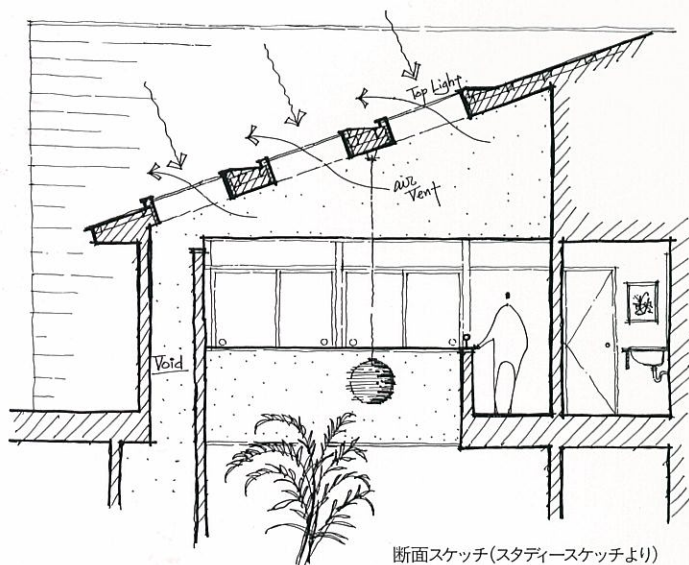
天窓から降り注ぐ自然光線は四季とともに刻々変化する。



アーティストの家 / 秋葉謙司



西陽の遮断と
遮音効果をねらい、
2枚の垂直パネルを設けた。



断面スケッチ(スタディースケッチより)

わが国に於ける代表的な日本建築をあげるならば、私は何よりも桂離宮だと言いたい。それは平安朝以来、磨きに磨かれてきた日本人の感性と美意識が、そのまま形に現われたものように思う。

その桂離宮松琴亭の点前畳上の突上窓は、仲秋の名月が差し込む角度にしつらえてあり、月光をいざなう工夫がされている。

一般の茶室の天窗は床に向かった^{かけこみ}堀込天井に切られている。それもまた、「暁の茶」でほのぼのとした光が突上窓から床内にさし込むことを計算に入れてのことのようだ。

先人がどんな演出を茶室で試みて、人に感動を与えたかを探ることが大切である。

こんにちは、施主や建築家、施工業者は先人の感性の眼で見ることも必要かと思う。



寒冷地ながら、天窓からの自然光が人に感動を与え、心を和ませる。



秋葉謙司プロフィール

1931年山形県生まれ。山形市立工業高等学校建築科卒業。天童木工、東北工科大学専門学校講師を経て、1966年(株)真理デザインスタジオ設立。秋葉謙司建築研究所主宰。主な作品/テニスコートのある家、朝日鉱泉ナチュラルリストの家、香月苑、リンゴの丘に建つ家、月見台の家、金山町森林組合モニュメント。

太古の人々は、大天上の下、こんなに気持ちの良い暮らし方をしていた。

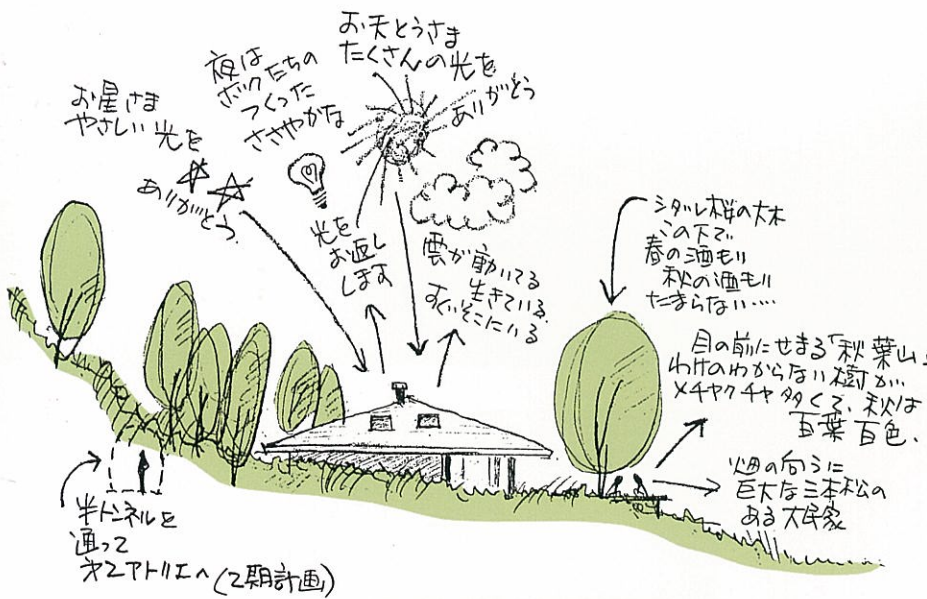


国際的に高い評価を受ける画家、そして絵本作家のS氏の仕事場には、ピンと張り詰めた空気と、やさしい光が漂う。

S氏アトリエ / 田中英男



深い緑、そして小さな虫たちと暮らすこのアトリエから、たくさんのタブローや絵本が誕生している。



光と陰は、どうしてこんなに美しいのだろう。木洩日の下で、大の字になって着い空を見ていると、言葉にならない至福の喜びが足の先から浸み上がって来る。太古の人々は、何といい暮らしをしていたのだろう。屋根の無い家を造りたい、そう思った時ベルックスと出会った。もう13年も前になる。

信濃の山中、濃緑な茂みの中に沈むよう建つこのアトリエは、大きな屋根を持ち、軒は深く、別名「竪穴住居」と呼んでいる。方形のスペースを斜めに分け、一方をアトリエとし、残る一方を栖(すみか)とした。建物の中心に大きな薪ストーブを据え、全空間を一つにしてビラを廃した。

精神性の高い作品を描かれるS氏の仕事場として、横からの光を抑え天上からの光を取り込み、静寂で、陰翳の美しい空間を造ることに心掛けた。床は松の大木を板に挽き、一年間陰乾しをして加工した。軟らかくキズもつきやすいが、暖かくやさしい感触は得難い物がある。



このゲストルームには、多くの知人が執筆を兼ねて滞在する。



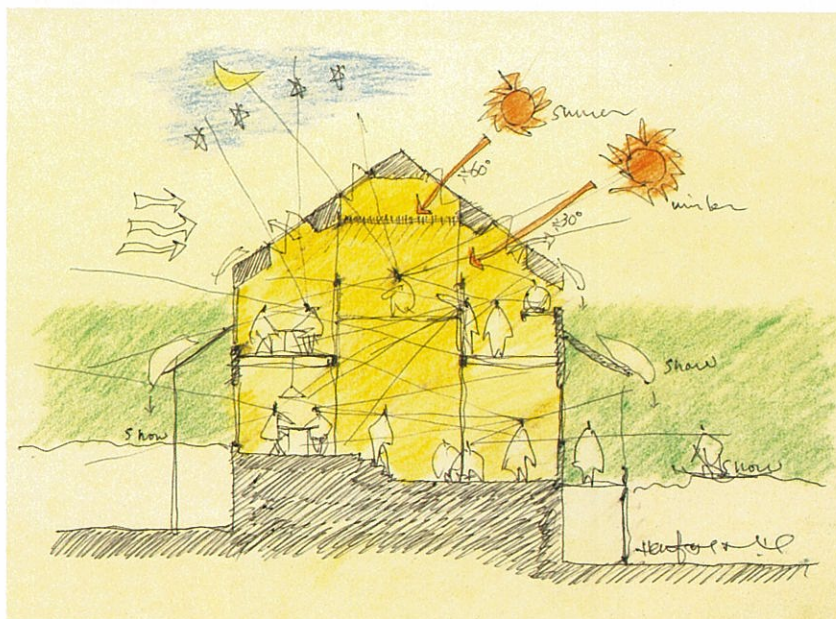
田中英男プロフィール

1944年長野県生まれ。1983年まで家業(創400年)建築資材卸に従事、独学で建築を学ぶ。信州美術会会員。1986年栖ゾーン設立。住宅を中心に陰翳空間設計の追求と情報提供活動を行う。毎月発行の「住みこなし情報」は現在120号になる。主な作品 / 星工場、火焚人の栖、楽器と暮らす栖、星工原、戸隠の民家、風致亭、星窓の栖、不二見窯、安堵の栖、寺院の客殿や庫裏として有機栽培の農場など、手掛けた設計は200軒を越す。

天から降りそそぐ光が、建物の隅々にまで一体感を与えてくれた。



春の雪解け、新緑の初夏、
紅葉の秋、雪一面の白い世界の冬まで、
四季折々の表情を見せてくれる。



芦原ニセコ山荘／圓山彬雄(URB建築研究所)



冬の厳しいニセコに建つこの山荘は、やはり雪に埋もれた冬こそ人が集い、豊かに美しい。

はじめから“いい空間”などありはしない。使う人がその中で新しい自分を発見したり、空間と対話したりしながら、生きた空間をつくりあげていくものだ。そんな建物でなければ、設計していても面白くない。

この「芦原ニセコ山荘」は、北海道びいきの建築家・芦原義信氏が所有していた土地を北海道工業大学へ寄贈したことから始まった。学生たちとともに過ごすための、いわばセミナーハウスである。芦原氏から提示された「一緒に住み、いっしょに食事をし、ディスカッションもできる」というコンセプトのもと、「個」よりも「集合」を重視して設計にあたった。個室は、ほとんどない。オープンな宿泊室には、二段ベッドが並ぶ。そのかわり、「瞑想室」を天井近くに設けた。学生たちが集まって、壇上の広間に腰かけて討論できる空間は、吹き抜け。この部分は重要だ。スケッチを眺めているうちに、屋根にはトップライトを設けようと思った。アトリウムは魅力的だが、2mを越える積雪のことを考えて天窓ということに落ちついたが、うまくいった。

建物中央部の吹き抜け空間には天窓から光が降りそそぐ。それは1階と2階の空間をダイナミックに連続させ、隅々にまでさわやかな開放感が満ちあふれる。暮らしの中で閉じこめられていた感性が、大自然の天空に向かって果てしなく広がっていく。



星、月、そして朝日。ルーフウィンドウから訪れる自然の光景が身体にやすらぎをくれる。



圓山彬雄 プロフィール

1942年新潟県生まれ。1967年北海道大学大学院修士課程修了。1979年URB(アープ)建築研究所開設。北海道工業大学非常勤講師、北海学園大学非常勤講師。1986年度日本建築学会北海道支部「北海道建築賞」受賞。1989年(社)日本図書館協会「建築特定賞」受賞。「札幌市都市景観賞」受賞。



VELUX®

日本ベルックス株式会社

本社
〒151-0051 東京都渋谷区
千駄ヶ谷1-23-14
ベニーリーフビル
Tel. : 03-3478-8141(代)
Fax.: 03-3478-8147

札幌
〒003-0024 札幌市白石区
本郷通7南3-15
シティスカイコート2F
Tel. : 011-864-4761(代)
Fax.: 011-864-4760

仙台
〒981-3133 仙台市泉区
泉中央1-34-6
アルファートムビル3F
Tel. : 022-373-8831(代)
Fax.: 022-373-8854

名古屋
〒465-0095 名古屋市名東区
高社1-266
ラウンドスポットー社4F
Tel. : 052-773-3517(代)
Fax.: 052-773-3572

大阪
〒532-0011 大阪市淀川区
西中島4-6-24
大拓ビル9 2F
Tel. : 06-6300-5036(代)
Fax.: 06-6300-5206